

令和7年度第1回松戸市文化スポーツ推進審議会 議事録

| | |
|---------|--|
| 1. 開催日時 | 令和7年7月30日（水）18時～20時50分 |
| 2. 開催場所 | 松戸市役所 新館7階 大会議室（zoomによるオンライン含む） |
| 3. 出席者等 | <p>【委員】（名簿順）15名 熊倉委員（会長）、小島委員、岩下委員、菊田委員、坂委員、局委員、大成委員、菊地委員、秋葉委員、武田委員、羽賀委員、森委員、山根委員、和座委員</p> <p>【松戸市】 文化スポーツ部長、生涯学習部長、学校教育部長 文化スポーツ政策課長、スポーツ振興課長、 スポーツ施設担当室、国際推進課長、社会教育課長 文化財保存活用課長、博物館次長、戸定歴史館長、 図書館長補佐、教育総務課主査、事務局（文化スポーツ政策課）</p> |
| 4. 傍聴者 | 1名 |
| 5. 次第 | 1 ゲストスピーカーによる事例紹介 2 議事 （仮称）松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針について 3 その他 |
| 6. 資料 | <p>【配付資料】 資料1 （仮称）松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針について 資料2 令和6年度第2回文化スポーツ推進審議会 会議録 資料3 令和6年度第2回文化スポーツ推進審議会 意見票（小島委員）</p> <p>【参考資料】 参考資料1～4 文化芸術及びスポーツの範囲に関する参考資料 参考資料5 ゲストスピーカー（山崎 伸夫氏）プロフィール 参考資料6 新任委員プロフィール 参考資料7 松戸市文化スポーツ推進審議会設置条例</p> |
| 7. 議事 | 以下のとおり |

開会

1 ゲストスピーカーによる事例説明

(熊倉会長)

前回の審議会では、文化やスポーツを通じたまちづくりを進めていくためには、個々の活動のネットワーク化が求められると感じ、松戸市内で様々なネットワークを生かした事業を展開しているまちづくり会社に事例をご紹介いただいた。

今回はスポーツを通じたまちづくりの視点から龍ヶ崎市でNPO法人クラブドラゴンズとして活動されている、山崎伸夫様にお越しいただいた。

山崎様の主な活動については、お手元の資料の 35 ページにあるので、ご参照いただきたい。

ゲストスピーカーにお話いただいた後、質疑応答に移る。

(山崎氏)

私は今年 73 歳になり、いろいろな経験をする中でスポーツに関わる事項が私の原点だと思っている。そのスタートが小学校の頃、東京オリンピックである。テレビないし映像を通して見た素晴らしさと、日本人と外国人の体格の差を目の当たりにした。地元の龍ヶ崎市のオリンピック選手、岡野功 氏が、柔道中量級で見事に優勝し、そのパレードを学校の前で見たことは、今でも鮮明に覚えている。

大学卒業後、自分たちで 20 人弱のバスケットボールクラブを作った。

リーグ戦に出ている間に、みんながむしゃらに練習するようになった。リーグ戦は、4 部からスタートし、翌年に 3 部に上がって優勝し、その翌年は 2 部に昇格した。2 部には社会人の中でもトップクラスのところもあり、苦しい状況だったが、優勝してしまった。1 部行くとコテンパンだった。楽しむ間もなく、辛いだけだったがそれでもなんとか 3 年近く活動した。

我々はクラブチームとして体育協会に加盟し、それ以来、50 年ほど体育協会の仕事をさせていただいている。今はスポーツ協会として独立しているが、当時は若手として意見が通りにくいなかでも、おかしいと思う点は述べていった。それが続き、やめるにやめられず、現在に至る。

10 年以上前にスポーツ推進計画審議会の副会長を仰せつかり、裏方の仕事を中心に活動した。スポーツ協会という立場上、市役所との関わりは強い。正しいと思ったことについてはきちんと言うのが私の信念。審議会ではいろんな意見を出されるが、私は主に筋道に戻す役目をしていた。社会教育委員も 20 年近く経験した。

皆さんは私より十分な活動をされているので自分の意見を述べると思うが、審議会の委員になられたのであれば、仲間たちには報告ぐらいはした方がよいと感じる。会社員の時代の研修でも「とんちんかなことを言うような人をチームも入れた方がよい」といわれたが、違った意見を集約していくのも一つの手段ではないかと思う。審議会の中の学識経験者は非常に大切だと思う。いろんな観点から鋭い意見が出る。そ

して若者の意見も吸い上げて欲しいものです。

50 年以上にわたってボランティアをやっていたが、最終的に行き着いたのはボランティアとは「人のためではなく、自分のためにやっている」ということ。自分のためなら、他人にどう評価されようが、自分が良いと思ったものは続けていくことになる。

また話は変わるが6年前に心筋梗塞で倒れたが、そのときに初めて自分の命の大切さを感じた。心筋梗塞ではあったが、意識を失っていなかったので、自分で救急車を呼び、病院についた時も、入院・手術の際に必要な家族のサインが、家族が到着していなかったの、自分でサインし、先生にびっくりされた。約1時間半の手術中も、モニターを見ながら、先生と話しており、「変わった患者だ」と言われた。このような状況でも助かった理由として、スポーツ協会などで、いろんな講習、特に救急救命講習も2回程を受けていたので、九死に一生を得た。健康の大事さを共有するためには、経験をアナウンスすることも大切だと思っている。スポーツをやっていたことによって、こういう状況でも機転が効いた。健康の知識は持っていて損はない。

(熊倉会長)

山崎様ありがとうございました。

今のお話に対してご質問、コメントなどあるか。

(岩下委員)

規模は違うが、私もフットサル教室を開き、それから独立して、今はフットサルチームをやっている。いろんな年齢の方が集まって、楽しい時間を過ごしている。いろいろ考えがあったが、継続が難しい時期もあった。そのようなは時期どのように乗り越えたのか。

(山崎氏)

地域の学校の先生の協力のもと、中学生のバスケットボール大会を40年にわたって継続開催したので、親も子も大会出場していた方もいた。

公的なものではなく自主的な大会で、大会を運営するには費用がかかる。スポーツ協会の予算も微々たるもので、体育館を2日借りるだけで予算3万円が飛んでいく。中学生に自由に参加もらうのが趣旨だったので、参加料を取るわけにいかない。体育館のやりくりだけでも大変だった。どうやったらできるのか、足りない部分をなんとかしよう創意工夫した。逆に予算を前提にすると、何事も進まない。

子どもたちにいかに前向きに参加してもらえるかを念頭に置けば、予算に関係なくいろんな工夫の中でできる。まず予算度外視で、何をしたいのか、そのために協力者をいかに集めるかにかかってくると思う。

(坂委員)

私の経験とも非常によく似ている。スマホもなかった時代には、スポーツ活動がで

きる人を電話帳で調べて探す感じだった。昔は、電話やFAXが通信手段だった。そのため、人と知り合うことや見つけ出すことについて、コミュニケーションや関係者との連絡は非常に苦労されたと思うが、それに教えていただきたい。

(山崎氏)

指導者や経験者を探すのは大変だと思う。昔は、大会の審判に呼び出され、会場が3つも4つも分散され、非常に大変だった。それを引き受け続けるのではなく、逆にさじを投げることも必要だとも感じた。というのも、そうすると地域がなんとか探す努力をし始める。

今は子どもが少なくなって子ども会が消滅し、活動ができなくなっている。子どもの減少もあるが、子ども会活動そのものに疑問を感じている人が多く、犠牲的なボランティアになっている。自分ができる範囲内で活動は継続できないので、自分たちの中で探してもらうのが一番適切。

(坂委員)

お聞きしたかった点として、資料1の6ページに、前回のゲストスピーカーからの提案で、「人材はいるが、それをつなげるコーディネーターがいない。人材渋滞がおきている。人を巻き込むことが必要」とあった。それを実現するためには、いろんな現場に出ていき、いろいろな人と知り合い、それでお声をかけさせていただくという、昔ながらの地道な活動の中で人とのつながりを作っていくことだと理解した。私ももうちょっと汗をかかせていただく。

(山崎氏)

今の時代、手法はたくさんあると思う。

(熊倉会長)

実り多い議論ができた。今の時代としての手弁当でもやりたくなるようなネットワークづくり、やってみようという情熱がいろいろな人々を動かしていく点、それでも長く続けていくのは大変と、話を伺って感じた。

新任委員自己紹介

(森委員)

最初のキャリアとして、東京都江東区の文化センターに勤め、生涯学習の講座の企画などを担い、その後、芸術文化も展開する「ティアラこうとう（江東公会堂）」に異動し、舞台芸術などもやり始めた。

2002年から、アサヒビールによるアサヒアートフェスティバルの実行委員会に初期から携わった。寂れてしまった商店街にアートを使って活気を取り戻そうとするような事例も多く、そういう地域課題に向き合う全国各地のアートNPO団体によるネットワーキングの会なことをやっていた。これは、生涯学習的なことでもなく、美

術館、舞台芸術、ホールでやるようなこととも違う。商業活動でもない。今だったら「まちづくり」と言えるのかもしれないが、そういうような模索している人たちと話し合う時間をたくさん過ごした。

そんなこともあって、生涯学習のバックグラウンドがあって、舞台芸術の世界をやって、そのような経験もあり、福島県いわき市に「アリオス」という劇場ができるときに、誘われ移った。この劇場では舞台芸術のプロデューサーとしてのオファーではなくて、街と連携して、まちのコミュニティに入ってほしい、要は街と文化施設がどういう関係性を作っていけるかなことを専門的に考えて欲しいと市から言われ、ロビー、公園、街中の他の施設などとの連携を主に担当した。

プロフィールに書いてあるが、この社名にある「渚」は海岸線のこと。「渚」は、よく見ると陸と海の境界がない。実際に境界は動いていて、定まっていない。この定まっていないあたりを象徴的とらえ、芸術文化と社会の両方に跨って活動するようなことをイメージし、社名の「渚と」の名前の由来になっている。

事例の話も少ししたい。いわき市のアリオスの立ち上げでは、ロビー、公園、街中との連携が仕事で、マーケティングマネージャーという役職だった。マーケティングマネージャーというと、チケットをどうやって売るか、この施設をどうやって借りてもらうかなど、いわゆる狭義のマーケティングをイメージするが、そのためのセクションではもったいないと思った。チケットを売るのは売るが、施設全体の顧客を作らないと、演劇や音楽が好きな人しか来ない。ざっくり文化系だけど、クラシック音楽も好きではなく、演劇ファンでもないけど、言われたら見るし、おもしろそうだったらやってみる的な周辺層を主なターゲットとし、どうやったら自分の街の施設だと思ってもらえるをテーマにマーケティングを考えた。このとき、「関係性のマーケティング」という言葉を作った。公的な施設なので、事業の前に起案を作るのだが、普通は簡潔に書くが、論文的な、「関係性のマーケティングとこういうことである」という起案を書いた。

いまだかつてない劇場にするため、どういうことをするのかを考えた。藤浩志さんというアーティストがいるのだが、福岡にご自宅があって、その藤さんと一緒に「アリオス・プランツ！」という事業を行った。これは通年事業で、2ヶ月に1回ぐらい藤さんが来て会議をする。会議では、何がしたいか、あなたはここにどういうことを求めるか、というようなことを市民と話し合った。

この意見だしの中で、最初のうちは、「かつてこういうことをいわき市でやっていたから」という文脈での意見、何か要望を言いたい感じがほとんどだった。半年ほどそんなことが続いて、私から「私たちが何かをやるのではなく、皆さんが何かをやるんですよ。ここを使って何かやりたいことがあったら、その実現を応援する」と言った。また市内を歩いて実際やりそうな人を連れてきて、会議も活性化するようにした。「アリオス・プランツ！」という会議体は本当に無名の人たちが集まって会議をすることをした。やりたいことがいろいろありすぎたので、最後はフェスティバルをやろうとなり、階段で踊る人がいたり、急にサックスを鳴らす人がいたり、パンを売り始める人がいたり、いろいろなことが起こった混沌としたフェスとなった。

2011 年 3 月の東日本大震災後には、このチームが大活躍をした。街の重鎮などは、なかなか腰が上がらず半年ぐらい機能不全を起こしたが、プランツのメンバーは 1 週間後とか 1 ヶ月後ぐらいには動き始めていて、例えば、避難所で救援物資がうまく回っていないことがあったが、自分たちで倉庫を借り、自分たちで支援物資を集め、自分たちで配り始めるなどしていた。

自分はまちづくりをしている意識はまったくなかったが、結果的にまちづくり的なネットワークになっているんだなと感じた。

(秋葉委員)

プロフィールにあるように渋谷区で広告代理店のプランナープロデューサーみたいな仕事をしている。その傍ら、渋谷区の外郭団体、一般社団法人渋谷未来デザインというところに籍を置いており、そちらでスポーツを通したまちづくりみたいなことをしている。私は松戸出身で、定期的に帰っているのでお声がけいただいた。地元貢献というか還元できることないかなということで、今回引き受けさせていただいた。

資料をまとめてきたので、簡単に我々がやっていることをご説明する。

一般社団法人渋谷未来デザインと申し、フューチャーデザイン渋谷ということで FDS と呼ばれている。「シンクアクション」ということを掲げていて、「考える」みたいなことが多いのだが、考えたことをいかに社会に実装させていくかみたいなことで、必ずアクションを起こしていこうという形でやっている。外郭団体でこういったものは全国的に見ても珍しい。基本的に行政は住民サービスを行う機関なので、どうしても閉鎖的なまちづくりになってしまう。渋谷は 300 万人が毎日トラフィックするという街なので、渋谷区長は住む人、働く人、あと学ぶ人、インバウンドなども含めて、300 万人の者でまちづくりを考えるべきじゃないかということで我々が作られた。

もうひとつは投資。東京 23 区で税制的には特別区になるので法人税が入ってこない。なので東京都に吸い上げられたものが分配される形となっている。住民税は所得に応じるというところで、人数が多くて所得が少ないところはサービスが落ちてしまう。渋谷区は 23 区中歳入のサイズが 21 番目なのでイメージ以上にお金がない。そういった中で渋谷の歳入だけで 300 万人の問題を解決していこうと思うとやっぱり無理があるというところだ。一方で世界的にも知られているまちでありブランドがあるので、いろんな企業が渋谷で何かやりたいみたいなのところがある。我々はその企業のお金やリソースなどを使いながら渋谷のまちを開いていくことで、企業側の企業課題と地域側の地域課題や社会課題を重ね合わせながら、WIN-WIN になるような、まちづくりをしていこうということでやっている。

基本的には渋谷区が掲げている基本構想、7 つのジャンルについて、半分ほどは渋谷区が苦手なことを我々がやるハウスエージェンシーみたいな機能だが、一般社団で会員組織になっているので、やりたいことを一緒に考えていくみたいなのをしている。

代表理事は小泉先生という東京大学のまちづくりの教授が務めている。他には渋谷区の商店街連合会の会長さん、副区長だったり、そういった方に理事に入っていた

き、幅広いジャンル、学識から民間から地元までいるという組織になっている。ドコモさんとか、ソニーさん、東急さんなど、大きい企業から我々のようなエージェンシーみたいなところ 170 社ほどが組織を支えている。

活動の内容としては地域課題の解決である。まさに渋谷区民のために地域課題を解決していく。あとは地域交流、地域自体の交流と活性化みたいなことを、地域住民だけではなくて学びと働く人、訪れる人で活性化していこうということを行っている。

あとは未来デザインなので地域の可能性みたいなものを探っている。未来を示すものとしてデータやデジタルなどのジャンルのこともやっている。かなり多様なプロジェクトを行っているが、私はその中でもスポーツでまちづくりをやっていく渋谷プレイグラウンドというプロジェクトのディレクターを務めている。

民間企業のことをだけを考えるのではなく、まちの課題を解消していくなかで、民間活力を入れていく。私たちが掲げる 이슈（課題）としては、少子化も含めた子どものスポーツ離れみたいなものが進んでいることと、部活動の地域移行だ。スポーツを取り巻く格差みたいなものがあり、今後部活動が学校じゃなくて地域に移行していくと、本気でやりたい子たちが民間に流れて、クラブチームやユースになっていくだろうという話になる。そうすると、体験格差や一番は経済格差が生まれ、なれる子となれない子が出てきてしまうところをまちとしていかにセーフティーネットを作っていくかみたいなことを課題解決として置いている。

目的としては、渋谷区は基本構想に渋谷を 15 平方キロメートルの運動場に、ということ掲げている。渋谷は非常に狭い街なので大きいスタジアム、体育館、アリーナはない。まちの空間や公園などをスポーツに開いていくことによって、区全体で運動場を作っていく、渋谷らしいスポーツの可能性を作っていこうという活動をしている。

我々は 2018 年から活動していて、2024 年から渋谷プレイグラウンドという活動になっている。2018 年からいろいろな実証実験などを行ってきた。その事例を紹介する。

渋谷らしいスポーツというと野球やサッカーになりやすく、ストリートスポーツになる。バスケットボールやランニング、スモールフットボールみたいなものになる。2018 年にあったのはネクストジェネレーション、アンダー15 カテゴリーのスポーツだったが、なかなかそういう大会がないというところで、渋谷に大会を作ろうとなり、まずはイベントとして、ネクストジェネレーションという大会を作った。他に、まち中にスケートパークを作ったり、ステージを作ったりした。アンダーカテゴリーの子どもたちが渋谷のまちで大会に出るみたいなことをいろいろなジャンルでやって、この中からオリンピック選手が出てきた。6 年かけて発表会や実証実験のイベントで街を開いていくことをやった。

他には、プレイヤーの大会をやるだけでなく、高校生や大学生の育成世代、スポーツをやる側だけではなく、スポーツのイベントプロデュースをするような子たちを育てるということも並行してやっている。

あとは、トップレベルの子たちをクロスジャンルで集めて、単純にスポーツをやるだけではなく、トップアスリートを呼んで心技体みたいなところを学べたり、ジャン

ルでネットワークにできるようなイベントをしたりしている。

私は渋谷未来デザインに入る前にナイキジャパンというスポーツブランドでマーケティングの広報にいた。20 年前から代々木公園を使った取組を行っていた。ここではバスケットボールの大会をジョーダンブランドと開催しており、今は 80 チームほど集まっている。ここから B リーガーが生まれたり、日本代表が生まれたりといった循環が作られている。

大会だけじゃなく、老朽化していた公園のコートで税金を 1 円も使わずにクラウドファンディング等でグラウンドをリニューアルするみたいな活動もしている。

続いてランニング。元々ランニングは公園がトレーニングのメッカみたいなところがあり、バスケやスケボーと比べてランニングはクレームが来ない。日本のランニングは 2005 年に東京マラソンができたところからブームを起し、ずっと人口が増えてきていたが、2020 年のコロナの時に初めて鈍化した。ランナーがマスクをしないで走っていると、マスク警察みたいなものがあつた。そのため、2021 年、少しコロナ禍が緩んだとき、ランナーだけじゃなくメーカーであつたり、公園、地元行政など、いろいろなステークホルダーが集まってランニングロードを考えようというイベントを行った。

ランニングが鈍化した理由が 2 つあって、1 つはコロナによって大会がなくなったこと。もう 1 つは、グループランをしていたコミュニティがコロナによって走りづらくなって、なんとなくランニングのモチベーションが鈍化したことがあつた。

そこで、「YOYOGI PARK FKT」というイベントを行った。これは一緒に集まって走ることにはできないし、大会はできない。けど、マイクロレースみたいな感じで、アプリなどを使って、その期間中にそのアプリを使って走ると同じ大会を走っているかのようにランキングが出るみたいなアイデアを考えた。みんなで考えたアイデアをその翌年に実装するようなプロジェクトを作ったりした。

また、渋谷区とニューバランスで協定を結び、ランニング先進都市渋谷を目指そうというところで、イベントだけをやるのではなく、考えたことが形になっていながら、行政や地域を巻き込みながら、みんなで考えてより良いスポーツ環境を作っていくということをステップアップ型で行っている。

これを経てウィメンズマラソンという、女性のみで 6000 人ぐらいが参加するイベントだが、こういった大会運営もやった。こういった、実証実験を経ながら、だんだん地域に根づいていくみたいなことを行ったりしている。

部活動の地域移行について、渋谷区は早めに取り組んでいる。区立の小学生の 6 割ほどが中学受験をするので、区立中学が 4 割ほどになる。どの学校も 1 クラスぐらいしかなく、部活をしないという地域特有の悩みがあり、いち早く地域移行を進めようということで行っている。そこで元々学校にはないストリート版の部活動みたいなものを作ろうということで、ブレイクダンスとダブルダッチとフリースタイルというリフティングみたいなもの、あとスケボーに特化した部活動を、民間で我々がフレームを作り、そこに渋谷区の中学生在が参加できるものを作った。2024 年から行って、いろいろな中学校から子どもたちが集まった。すると場所が必要だという話になり、さらに

スポーツのコミュニティスペースみたいなものを作ろうということで、2025 年4月に場所を作った。

渋谷だからできるのだろうという話はあるが、松戸は人口が倍なので、いきなり箱物を作るよりは、いろいろなステークホルダーで考えていきながら、なんとなくそういう機運が高まったり、コミュニティが生まれたりする。そうすると、場所が必要だという話になってくる。その事例として、代々木公園のC地区に Park-PFI という事業モデルでダンススタジオを作った。ここで、先ほど言っていた部活動であったりとか、イベントだったりとか、拠点型でやっている。機能としてはダンススタジオだが、多目的でいろいろなスポーツに使える形になっている。スタジオというよりは、いろいろなコミュニティが空いた時間に溜まれる場所だ。

渋谷はもともとアーバンスポーツやストリートスポーツの聖地みたいな背景があるが、大型の都市開発の中でどんどんまちの余白がなくなって、そういったスポーツがなくなった。2018 年からこういう活動をしているが、渋谷らしいスポーツ文化を取り戻そうみたいなことをしてきた。

そのため、スケートボードとダンス、フリースタイルアプローチみたいなものに特化したスタジオである。スポーツのコミュニティが無償で使えるようなスキームを作っている。

アンバサダーみたいな人にも立っていただいて、一番左側はパリオリンピックの日本代表。アンバサダーになってもらって、彼が日常的に練習するスタジオとして活用しながら、いろいろなコミュニティが入ってくるみたいなことをしている。他には、ダンス、ダブルダッチ、フリースタイルバスケットボールの方にもアンバサダーになってもらっている。

スタジオといっても、無償で使ってもらうだけではなくて、民間企業に使ってもらってちゃんとマネタイズをしていくとか、自立してお金が回ることを目指している。資生堂さんであったり、スポーツやコミュニティに興味があるという企業さんにこの場所を使ってもらったりして、共通の価値みたいなものを一緒に作っていくみたいな活動をしている。

元々渋谷の色々なところでイベントをやっていたが、それだけだと切り花的で枯れてしまう。イベントをやってきた知見を生かして、5～6年ほどの中期的な計画の中で作っていき、まちの人たちも理解していたり歓迎しているような空間を作りながら、コミュニティが生まれて「場所があるといいよね」と、切り花だったものが根を張ってきたという形となっている。

これは渋谷だからできたと思うが、松戸にはマツモトキヨシ、マブチモーターなどがあり、松戸にも生かせないかなと思って参加させていただいている。トップアスリートとのネットワーク等もあるので、松戸に持ってこれると貢献できるのかなと思っている。

議事 松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針について

(文化スポーツ政策課長)

資料1を用いて説明。

(熊倉会長)

意見交換に移る前に、質疑応答はあるか。

(森委員)

資料1の7ページの重点戦略3に、松戸ならではの文化芸術スポーツの魅力と、地域価値の向上のところ、下の1つ目に「稼ぐ力と市民の心に誇りにつなげる戦略的な取り組み」とあるが、稼ぐ力とは何を意味しているのか。

(文化スポーツ政策課長)

「稼ぐ力」と表現したが、文化芸術やスポーツの取り組みをするだけではなく、そこから経済的な取り組みにつなげるとか、何かを生み出すことにつながるような意味で「稼ぐ力」表現とした。お金以外の部分で生み出されるものも広い意味では「稼ぐ」としたが、こちらの文章はまた考えていきたいと思う。

(森委員)

文章的に違和感があり、先に「稼ぐ力」がなければ、「市民の誇りにつなげる戦略的な取り組み」としてすんなり理解できる。なぜ先に「稼ぐ力」が先にくるのか。稼ぐのがお金だけではなく、「気持ち」の部分もあるのかと思う。経済的な価値だけはないと考える。

(熊倉会長)

第2回、第3回の会議で、答申を出していくことになる大きな柱が、6ページの目指すまちの姿に関するこれまでの意見と、7ページの重点戦略の部分だ。本日はここのご意見をいただければと思う。

文化芸術基本法で基本方針が示されていて、文化芸術そのものの振興だけではなく、文化芸術が持つ経済的価値や社会的価値を高めるべしこととなっているが、国では経済的価値を頑張ろうとする方向性が強い気がする。それはもちろん否定するものではないが、基礎自治体が文化芸術で儲けるのは無理があると思っており、自治体ではむしろ社会的な価値のほうに視座を据えるべきだと考えている。欲張り過ぎないで新たな活動やネットワークを生み出していくようなものが良いだろう。自立していくことは模索すべきと思うし、本日もその可能性を秘めた事例紹介をいただいた。

部活動の地域移行は、先生のなり手が少ないのもあるが、先生の給料を上げればいいのと思う。とはいえ部活が中学校で成立しなくなるのは時間の問題で、それが地域のほうに移行する。既にスポーツは民間企業が手を挙げ、習い事として展開されて

いき、それでは経済格差によってアクセシビリティにも格差が生じるであろうことが、いろんなところで指摘されていて、文化芸術も同じようなことが起こっていく可能性がある。アクセシビリティの担保をして、居場所にもなれるようなことを行政としては真っ先に考えていくべきではないかと思っている。

(和座委員)

重点戦略について、子どもと青少年が文化芸術スポーツに夢中になる環境づくりをするにあたってひとつ話題提供したい。私は医者で、50代を超えると死因で大きいものは癌だ。ところが15歳から40歳ぐらいまでの死因のトップは、男性も女性も自殺。G7の中で日本が最も自殺率が高い。この現実を見たときに、なぜ日本がこんなに落ちてしまっているのか、いろいろな原因があると思うが、子どもたちが自分を肯定できないことがあり、自分が大切にされているとか、自分の意見が尊重されているなどの気持ちを持つことが重要だと思う。人権の関わりの中で考えたときに、子どもの4つの人権があるが、4番目に参加する権利がある。子どもが参加する、つまり子どもがいろいろなことについて考える。子どもが言っていることを尊重することは重要だと思う。

戦略の一番として、子ども・青少年が文化芸術スポーツに夢中になれる環境を作るためには、子どもの意見を取り入れないといけない。僕らが「こんなものだよね」と話をして、それをここに入れたとしても、果たして本当に効果があるだろうか。我々は、これからの松戸の未来を考えると、彼らの考えをここに、できるだけいろいろな形で落とし込んでいく必要あり、その手法を事務局の方にも考えていただいて、そういったものを入れていきたい。

(武田委員)

ゲストスピーカーと新任委員のお話を聞き、巻き込む力と、継続するお気持ちすごいと思った。森委員のいわきの話では、会議の運営を通じて、心が育ち、マインドが変わり、結果的に人が育っていった。渋谷のお話を聞いていても、渋谷特有の難しさの中で、場をいかにうまくコントロールしていた。松戸の場合も、マンパワーがあるので、ポテンシャルを生かしきれてないのではと反省を強く抱いた。

部活動について、部活動をやりたいと思っている先生たちに、違う形で参加できること、お給料など、社会参加的な違う建て付けでのアプローチとして、学校とは異なるポジショニングをすることで、新たな部活動なことを創出することも可能なのではないと思う。もちろんそこには予算が必要だが、それはあくまで生涯学習と子どもたちの未来の投資である。

またスポーツだけでなく、文化の方でもそれを盛り込むかと考えた時に、森委員の話を聞いて、前向きにやれることがあるような気がすると思った。

その一方で、「稼ぐ力」言葉というのは私も気になった。行政の出す文章としては難しいと思う。

最後に質問をひとつ。「文化財保存活用」については、定義にこだわらない幅広い概

念ところがもう少しはっきりしないと、どういう活動ができるのか想像につながらないので具体的例が欲しい。

（文化スポーツ部長）

文化財保護法が定義する文化財はもちろんあるが、松戸市の文化財保存活用地域計画が対象とする文化財を議論したときには、風土、歴史、ストーリーなどがあがり、そういったものを幅広くとらえる意味で表現している。

（小島委員）

文化財保存活用地域計画を作成するときの委員の1人だった。教育委員会が中心になって、文化財を指定していくこれまでのやり方に加えて、地域の人たちが地域総がかりで自分たちにとっての文化財とは何かことをとらえ直す、それが文化財保存活用地域計画を作成する作業だった。

すでに認定を受けてから数年経っているが、松戸市の現状を見ていると、認定を受けた後の文化財保存活用地域計画の実施計画が具体化されていないようである。

文化財保存活用地域計画を市民全体で運用・展開していくことができるようになることが、私が審議会に参加しているひとつの意図でもある。

（熊倉会長）

参考資料に記載の、文化芸術の定義は、各分野を羅列するような形になっており、スポーツのように格好よくしたい。文化財は松戸市特有のものとして、みんなの明日の文化財として革新的なアイデアがある。文化芸術の定義は、スポーツや文化財のように、「～のようなもの」と定義できるとよい。文化庁に従う必要はなく、10年後には何が主流になっているのかわからないし、文化財の活用もいろいろな市民活動がもっと行われる可能性は十分にある。でもそれを「やりませんか」といえる人が足りないと思うので、そんなことも方針に盛り込んでいけたらと思う。

（和座委員）

先ほど子どもの人権か、参加することを、できるだけ意見を吸い上げていただきたいお話をしたが、事務局の考えを聞かせていただきたい。

（文化スポーツ政策課長）

子どもの意見、あるいは参加の権利ところ、方針を策定していく上で、そのような機会をぜひ検討していきたいと考えている。参加の仕方については、例えば子どもモニター等も含めて検討していきたい。

（熊倉会長）

最近是不登校の子どもたちがたくさんおり、嫌な学校に行く必要はない、フリースクールなどに行く形で義務教育を終えたことにすることも広がっている。一定期間そ

ういうところで自己承認欲求の発露、自分で折り合いをつけて中学校から学校に戻れた事例も聞く。

子どもの意見を吸い上げる機会も必要だが、意見を言えない子どもたちへのアプローチは時間がかかり、丁寧にやる必要がある。子どもの支援活動を長年してらっしゃるかたは、文化やスポーツが近寄りがたいと本能的に思っているお話を伺ったこともあり、安易に持っていくこと自体は逆に危険なことだと思っている。

子ども食堂などに文化スポーツの活動をつながたいと思うが、子ども食堂からは「レンタルスペースじゃない」と言われたこともあった。居場所で文化芸術の取り組みをすると、少し課題を抱える子どもたちだと通常の2割ぐらいしか来てくれなかったとか、精神的な格差が存在ようだ。そのため、ものすごく丁寧に時間をかけて子どもたちとの信頼構築を行い、「この取り組みは、自分たちに向けてやってくれているんだ」と思ってもらうまでに、逃げ場が必要であったり、様々な工夫が必要であったりすることもやっとわかってきた。

（和座委員）

今の会長のご指摘、非常に貴重だ。しっかりと意見が言える子どもは、ある意味では選ばれた子どもだ。いろいろな形で悩んでいる子どもは、そういったことが言えないからこそ悩んでいる。だからこそ、そういった子どもたちの声を聞くためには様々な方法、例えばSNSを使って自由に言わせるとか、あるいはファシリテーターがいて、その中でお子さんの気持ちを酌みながら話をしていくとか、様々なアプローチがある。その点については本当にこれからいろんな工夫をしながらやっていただければと思う。

（文化スポーツ部長）

会長と和座委員がおっしゃる通り、子どもが直接意見を表明してそれを受け止める子どもの参画の理念はもちろん尊重したい。ハイリスクな子どもも、会長や和座委員がおっしゃったようにアプローチを探っていくが、行政としては、その専門家や支援者から間接的ではあるがニーズを聞くというアプローチの仕方もあるので、工夫して検討してと思う。

（大成委員）

重点戦略の1になるのかなと思うが、教育現場にいろいろな人たちが関わっていくのも大事である。例えばイギリスではアーティストが学校に入り、ワークショップやる事例があり、結果基礎学力上がった事例もある。

あとは高松市の芸術士派遣事業は、幼児教育の中に専門家が入っていく事例。昨年の会議でも提案した。教育現場と文化やスポーツの周辺にいる人たちが関わっていくようなシステムを作っていけるといいと思う。

（小島委員）

次回の議論につなげていくためにもひとつ確認をしたい。10 年後を見据えた重点戦略の3 番目の4 つ目の項目に「文化財を活用した文化観光の高付加価値化」とある。

「文化財を活用した」については別の機会に話をしたい。ここで言う「文化観光」とは松戸市はどのように捉えているのか。10 年後を見据えての前提となる現在の文化観光についての考え方もご説明をいただきたい。

(文化スポーツ政策課)

現在の松戸市の文化観光では、有名なところだと、本土寺、矢切の渡し、野菊の墓、東漸寺等が当たっていると思っている。これらを活用して文化の発展に寄与するような形で価値をより高められないか意味合いで盛り込んでいる。

(小島委員)

観光に文化財を付加することで、文化財をある種の消耗品のように位置づけていくような方向性には反対である。文化観光と文化財をつなげることで「高付加価値化」という方向性については慎重に考えていきたいと考えている。こうした議論をすすめるうえでも、文化財保存活用地域計画の実施計画の策定が必要である。

(局委員)

重点戦略1「部活動の地域移行を好機」と記載があるが、部活動がやりたくて先生になっている方々もいらっしゃる。部活動を一生懸命やってきた中で、その部活を全国大会まで持って行きたいとか、学業だけの教育だけではなく、部活動にもやる気を持ってやっている先生がいる。「部活動の地域移行を好機」とするよりは、「部活動の地域との連携を鑑みた機会を提供する」のはどうか。一生懸命やりたいからこそ、地域ではこの時間しかできない時間プラス、社会活動枠組みで時間をプラスして、部活動をしている先生方もいる。書き方を少し大きなカテゴリーに、大きく考えられるような書き方にしていただけたらと思う。

私は児童合唱を20年教えている。合唱団は50年になるが、外でイベントに出たときに、そんなに長くやっていることを知らなかったと言われることが多い。つまり、スポーツや文化芸術に夢中になれる環境にはなっているが、だけどそれを披露する場が限られていると考える。ありがたいことに、毎年うちの合唱団はお声がけいただいて、クリスマスのイベントで披露させていただける。他にもたくさん活動している団体がある。頑張っている、夢中になっている子どもたちや大人もそれを披露できる場所、松戸で高めてきた音楽や芸術を披露できる場所等が提供できる窓口なものをもっとあったらいいと思っている。例えば西口デッキのイベントがあったら、うちの団体も出たかったのに、どこから情報が入っているんだろう、いつももどかしい感じで見ていることが多い。

個々の活動や分野においてのネットワーク化ところ、垣根を越えた政策の連携について、「今こういうことをできる場所があるよ。やりたい人はどうぞ」と案内できる窓口を作っていただけるといいと思っている。

(山根委員)

重点戦略1、夢中になれる環境づくりと謳われているが、草の根か、地域に根差した皆様の様々な活動が、文化・スポーツなどを発展させていくものであると私は信じている。文化やスポーツはスターのような人たちが自分たちの目の前に現れることがあらゆる人にとってものすごい刺激になるのではないかと感じる。私は音楽をやってきた人間だが、有名なオーケストラ団体などが松戸に来るとか、実際に人々と交流する機会をぜひどんどん増やして欲しい。そのためには人脈が必要で、小さいことからかもしれないが、積み重ねていくことで「松戸はいろいろな人が来てるよね」という形が生まれていくといい。

(菊地委員)

いろいろなお立場からの意見は本当に勉強になる。学ばせていただいている。

私も重点戦略1に着目している。部活動の地域移行の話題が出ているが、文科省はちょっと表現を変えて、部活動の地域移行ではなく「地域展開」としている。数年前に地域移行が出てきて、いろいろな自治体や地域で努力をして、まだ模索している。最初のものだと難しいと思われる結論を出している地域も多い。松戸も模索してるところだと思うが、もっと社会全体でという言葉が最近使われているため、そのようなニュアンスも入れていただけるといいと思った。

子ども・青少年が夢中になれる環境づくり、これは本当にその通りだ。学校教育の範囲は芸術においても運動においても、みんなが経験したほうがいいような基本的なことをやっている。でも昨今、例えばオリンピックでスケボーを見て自分もやりたいと思っても、自分の学校には部活動はない。そういうのってどこに行ったら体験できるんだろうみたいなことを考えている子どもはいる。子どもはいろいろなものを見ているが、体験しないとわからないことがとても多いので、気軽に体験できるような場があると、自分の好きなことを見つけられたり、先ほどおっしゃっていた自己肯定感が高まったりする。

子どもや青少年が夢中になれることはとても大事だと思うが、これは子ども・青少年に限ったことだろうか。大人が夢中になれるものがあることも大事ではないか。小学生は一人では出かけられないので、ファミリーで楽しめることが近道になったり、家族のきずなが深まったりすることにもつながっていくのかなと思った。

(岩下委員)

重点戦略1の部活動の件が出ているが、私は当事者で、現在は特別支援学校の教員だが、最初は、市川の中学校で部活を指導しており、今考えればブラックな生活をしてたが、本当に苦勞をいとわずやっていた。きつくてもやりたい教員はいる。

部活動の地域移行の話を聞いたとき、やりたくない先生や、やれない先生もいる。一方、やりたい方としては、部活動をやっているから、生徒指導も深い指導ができるという、とてもいい利点がある。なので移行ではなく連携とか展開とかで具体的な市

の政策などが広がっていくといいのかなと思う。

私は退職をして5年間再任用をして、また1年目からやっているが、現在特別支援学校だけでなく、本当に教員が足りない。教員のなり手が減り、メンタルがやられてしまって病休に入ってしまう先生も多い。その中でもやっている教員たちは、子どもたちが好きだから、教育がいいからことで一生懸命やっている。教育界の根本的なところで、このあたりから大きく変わる、変わっていかないと子どもたちの教育が心配だ。

自分はボランティアをやる中で、教員だけでなく、それ以外の人たちの意見を聞いている。うちの学校は部活動がないが、バスケットがやりたくてしょうがないお子さんがいる。そういう場所を探そうといったとき、娘がやっているバスケットにその子たちを招待して、バスケットをやる場を提供できた。やりたくてもできない人たちの場の提供は、私たちが施策を作る上でも、必要ではないか。

松戸でやることを絞ってやっていかないと、これからどうやってまとまっていくのが頭の中をよぎっている。具体的に絞る方向に行けたらいいかなと思っている。

(坂委員)

子どもの意見聞くことは本当に大変だ。大人が「これをやろうね」と言ってやると子どもはついてくる。でも一部の子は疑問を持っている子どももいて、かといってそれを100%取り入れることも難しい。うまく調整することが大事。

コーディネートする技術力、子ども会では、子どもたちをコーディネートするのが難しい。「子どもモニター」の意見も大切だと思うが、意欲があり、いろいろと知っていて、興味があって子の意見となる。でもそれ以外の子どもの意見も引き出せるようなことも必要。

とはいえ、すべてやることも大変。これは推進方針の戦略だが、具体的に例えば施設の老朽化も含めて、ソフトウェアとハードウェア、これも両立していくので、行政の皆さんは大変な部分がある。いずれにしても人材のコーディネートは必要と思う。

(武田委員)

子どもと大人を分けないほうがいいと思っている。松戸市美術展で最近、元教員だった方が、中学生の美術部の展示の場を作ってくれました。子どもは大人の「場所」と、同じ土俵で発表できることでモチベーションも上がる。

やりたいことが発言できない子どもにはこちらから提供するのもありだと思う。任されると感じると、思った以上の力を出すのが子どもの素晴らしいところ。松戸市の博物館での企画展覧会の時に、中学校の部活動に模写をお願いしたら、最初は「難しいのでは？」と学芸員の方がおっしゃったが、結果的に想像以上の作品制作をしてくれた。今まで美術館に来なかった子ども達の家族や友人などもいっぱい来てくださって企画展覧会にも相乗効果になった。大人になっても楽しんでいる姿を子どものときに見る機会があれば、「楽しめるのは子どもの時だけじゃない」と知ってもらえる。スポーツもちろんそういう機会があると思うが、文化でもできることがあると思う。

菊地委員がおっしゃっていたような子どもの中でのジレンマとかフラストレーションの解消には、学校以外のところで自己発見する、または自己解決して発展的に前に進めるようなチャンスとなる機会を作ってあげることが大切です。文化スポーツには、それがあると強く感じた。

子どもと青少年、大人を分断しない、スポーツと文化も分断しないで、共同出来ることを模索していくことでいい未来が描けるかなと勝手に想像した。

(菊田委員)

子どもや青少年という縛りをつけないでというお話があったが、全く同感だ。重点戦略2は多様性や共生社会ワードが入ってはいるが、この会議で取り上げられることはない。多様性とか、誰も取り残さないなところで「共生社会」ワードを入れたかったからとりあえず入れたような印象があり、文言も硬く、とりあえず「推進」という言葉を使った見え方になってしまう。外国人や障害を持った人など少数派の人たちの問題は、今はまだ「推進」段階にも来ていなくて、存在をそれぞれが認知する段階。

文化やスポーツに夢中になる環境は何も子どもに限ったことじゃない。個人的な意見として1番の重点戦略を、「すべての人が文化芸術やスポーツに夢中になれる環境づくり」として、ここに多様性や障害者の文言も一緒にしてしまったほうがいいのではないかと思う。

(秋葉委員)

(仮称)松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針の上位計画に松戸市総合計画とあって、松戸市総合計画では、「若年世代やファミリー層の転入を超過にすること」が基本的な戦略だと書かれている。転入超過を増やすことは、転出超過にならないこととしてやることを2つに分けた方がよいと感じた。

10年後の松戸のまちの姿とあるが、10年後の若年層ファミリー世代は、中学生とか高校生ぐらいなので、今の松戸にいる子どもたちが出てかないための施策が何かという話がひとつ。もうひとつは、今いない人たちが松戸に住みたくなるのは何かという話。今外にいる中高生が10年後、松戸に住むのか。それを、文化やスポーツに絞ったときに、今いる子どもたちが転出しないために何をやるか、そして今いない人たちが松戸に来るには何をやるかという分類をすると整理されると考える。

先ほど山崎さんが20代でバスケットボールクラブを作った話があったが、20代で何かをしたいというときにできることが大事。私は20代で松戸から出た人間だが、外で松戸の話をして、現状、すぐ松戸に住みたいとはならない。私が渋谷でやっていることは、20代の時に強烈にやりたかったことだったりする。

転入超過の話になると、子育てとか教育とか、子育て世代になったときに住みやすいかみたいな話になる。流山みたいに徹底的にやるぞということであればいいが、少なくとも文化スポーツでやる話ではない。

今、松戸を知っている人たちが、松戸に住みたくなるというステップがある、例えば、高校生や大学生、若い世代がやりたいことが10年後なんかに、ここに形になっ

ていくのを増やしていくとか、20代の人がやりたいことを増やしていくと、今、働きにきている人、学びにきている人が、「松戸いいね」という状況を作っていくなど、そのあたりをうまく細分化していくと、選択と集中になると感じた。

（和座委員）

ぜひ言いたいことがひとつあって、部活の地域移行とか地域展開の中でひとつ別の観点がある。

私は医者だが、整形外科のドクターたちが、一生懸命部活をやっている子どもたちが肘とか足とかいろいろなところを痛めてくることがあると言う。それは一生懸命な先生がオーバーユースにさせてしまっていることがあって、私は子どもの健康と成長がスポーツには非常に大切と思っていて、優勝するためにスポーツをするわけじゃないと考えている。競争ということもあるかもしれないが、あまりにも偏りすぎて健康を害してしまってはいけない。松戸にずっと住み続けるためにも体を壊したらダメだと思う。そのためにも、しっかりとした指導方法、科学的な指導方法を松戸ではしっかりとやっていく。もちろん先生たちは一生懸命勉強なさっていると思うけども、部活が地域移行すると別の先生たちが指導をすることになる。そのときに指導をする人のクオリティをある程度のレベルにしないと子どもたちが大変な目に遭うということを経験者の立場から話させていただいた。

（熊倉会長）

今の話は、方針の中では各論にはなりそう。重点戦略は、ギリギリ5つぐらいまでだろう。連携できるような仕組みができたとき、そこで議論することかと思う。

（山根委員）

皆さんが、いろいろと「こうしたらいいんじゃないか」「ああいうことをすればいいんじゃないか」とおっしゃっているのを聞いていて思ったのだが、広報することの大切さもあると思う。やったことをちゃんとやる、あるいはこれからやることをちゃんとやる。先ほど、「こんなことがあったのか、知らなかった」みたいなことをおっしゃっていたが、「こういうことをしているんだ」というのは、日本人はどうしても美德とかで、自分を宣伝するのはまずいという意識がある。だが、「松戸はこういうことをやっていますよ」とはっきり発言していく広報戦略も落とし込めたらよりすばらしいのではないかと思う。

（羽賀委員）

僕は現役のプレイヤーなので、イベントとか企画的なところはやったことがほとんどなく、知識だったりノウハウという、会議に必要な部分が欠けている部分はあるのだが、お話をいろいろ聞いて、自分も現役を続けるのが難しくなってきた中で、勉強になった。

部活動の話ばかりになってしまってしまうが、小学生の全国大会が禁止や廃止にな

ったりしてきている中で、地域移行のところで言うと、私は小学生からずっと野球をクラブチームでやっていて、ケガをするまでずっと野球をやっていた。好きだった、楽しかったことももちろんあるが、一旦学校の外のチームに入ってしまうと、もう野球以外をやっちゃいけないような雰囲気もあったりした。

今は車椅子ラグビーで全く別の競技だが、野球の経験が役に立ってないかということ全然そうではない。野球で培ったものが生きている。そうすると、他のスポーツ、例えばバスケットだったりとかサッカーだったりをやっていたら別の方面で車椅子ラグビーの力になった部分もあったんじゃないかとか、野球以外のスポーツで花開いたこともあったのかなと思う。

学校だと動きやすいひとつグループというか、そういうものを作って、チーム競技は難しいかもしれないが、例えば個人競技等いろいろなスポーツを1ヶ月や1週間単位で、その日によってやりたいものやっていく。そういったことを小学生とか義務教育のうちにやっていけたらいいなと。本当に好きで楽しくて、それに打ち込めるならそれでいいし、それがわからないならいろいろ動けたら、もっともっと才能ある子が花開いていくんじゃないかなと思う。いろんなスポーツの楽しみ方も学べるのかなと思っている。

(熊倉会長)

なかなか学校の部活は一度入ると抜けられない。もちろん悪いことばかりではないが、地域連携をすることで、地域で別のスポーツが体験できたり、選択肢の多様化みたいなことに繋がっていくといいと思う。

最初、この審議会がどうなるのかと心配だったが、すごくいい意見がたくさん出た。いらしてくださったゲストスピーカーと、刺激剤になってくださった新しい委員の皆様に触発されて、もともと皆さんが持ってらっしゃったポテンシャルが繋がってきた感じがして、大変うれしい。

秋葉委員からご指摘いただいた、転出転入のことを考えると、一番は子ども青少年だというのは譲れないと思う。確かにこの戦略を一目見た時、高齢者に冷たいなとは思ったが、前文等があるので、重点戦略の1はとりあえず子ども・青少年を掲げた方がよいと思う。重点戦略に「全員」と入れてしまうと重点戦略にならないので、これは生かしたほうがいいと思う。

部活動の地域移行については問題が多く、もう少し地域連携をすることで、多世代交流というようなことも機会が増える。また、学校に行けない子が部活にだけ行けるわけがないので、そうした子にも選択肢を用意するみたいなことは考えていけるかなと思った。

重点戦略2の共生社会の実現、全く何も考えていないというのはどうかと思うので、ぜひ当事者の委員の皆様方からもっとこういうふうに言ってほしい、我々も嬉しいという意見が出ると良いと思う。

一度事務局から事前に出てきたものは漠然としていたので、今回の案が少しはやりたことこのビジョンが見えてきたかなというところだ。本日、たくさんの熱心な議論をい

ただいて、さらに次、いいものになっていくと思う。次回、これをベースにぜひ皆さんで考えてきていただけると嬉しい。

夜遅くになってしまったが、ここで本日の議論は終わりにして、進行を事務局にお戻りする

3 その他

事務的確認。

閉会